

嘉永六年十二月の状況

嘉永六年（一八五三）十二月十五日、浦賀奉行の井戸石見守弘道が大目付に昇進して浦賀奉行職から離れた。井戸が浦賀奉行になったのが嘉永六年四月の末であり、在府（江戸の自宅を浦賀奉行所江戸役所として、幕府との連絡を取り合った）の浦賀奉行で、在任期間七カ月あまりと短い期間中に、ペリーが来航して国書の受け渡しが行われた前後のみ浦賀にいたという、日本中が注目した歴史的大事件のペリー来航に合わせて浦賀奉行になったような人物であった。

この井戸に浦賀在地の戸田伊豆守氏栄からの「内御用状」と称した私信が残されており『南浦書信』と題されている。始まりは井戸が目付から浦賀奉行になった嘉永六年四月晦日付のもので、「大変よい方が同役につかれたことで喜んでいゝ。これからは腹藏なく意見を交換したい」という文面で、早速「下曾根金三郎（高島流砲術者）が浦賀奉行所の砲術指南として来てくれた」ことなど、

浦賀の状況を記した。

最後の書簡は十二月十二日付であるから、井戸の手元に届いた時には、大目付への転任が決まったと同時ぐらいか。しかしその内容は年が明けると井戸が浦賀へ着任することを前提にしたものであった。戸田の一番の懸念は、十二月中にもペリーの再来が考えられる。その時に六月のような無様なことはできないことであった。幕閣の連中は六月の折は、原則をまげて久里浜での国書の受け渡しを行ったが、今度は外国と交渉窓口になっている長崎へ行ってもらえばと実情を知らずに考えているようであるが、再来するペリーには全く通用しないことであり、となればどのような事態になるかも想像できた。

この戸田の懸念に、十一月末の井戸からの極秘の書類で、老中阿部伊勢守が二度目のペリー来航の応接所は浦賀で行うことを決めたことが知らされていた。

十二月に入ると、戸田が六月の来航時に一番の活躍をした香山栄左衛門を江戸役所詰めにしたのは、香山の体験に基づく知恵を汲み取って欲しいとの思いからであった。十二日付の最後の手紙にも、香山が井戸だけでなく、老中の侍臣たちとも積極的に接触して、影響力を及ぼし、

効果があつたと綴っている。

その井戸が大目付へと昇進したことは、浦賀奉行より幕閣に近づき、発言力も増すので、戸田は喜んだことと思われるが、そのことを記したものはない。後任の浦賀奉行には伊沢政義が就任をした。伊沢は天保十年（一八三九）三月から天保十三年（一八四二）三月まで浦賀奉行に就いており、歴代五十二人の奉行で唯一、二度目の就任であつた。

伊沢は天保期に浦賀奉行を務めた後、長崎奉行に就任し、この長崎奉行時代には、オランダからの開国勧告文書に対する折衝やイギリス船サラマン号への対応で活躍していた一方で、鳥居耀蔵と組んで、西洋流砲術家として活躍していた高島秋帆を不法逮捕したことなど鳥居耀蔵の行き過ぎた行為と連座したと見做されて、長崎奉行を罷免され、浦賀奉行に就くまでは閑職の寄合衆であつた。